
魔法戦記リリカルなのはvivid of Basara

天空 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはvivid of Basara

【Nコード】

N2751X

【作者名】

天空 翼

【あらすじ】

戦国BASARAの世界……ある日、徳川家康の目の前に伊達政宗そっくりの青年が現れる。言葉を話す石を持った彼はネフィと名乗り家康に勝負を仕掛けてきた。それが引き金になったかのように日ノ本で強い武将達が襲われるという事件が次々に発生し始める。その全ての事件は政宗そっくりの青年、ネフィにより起こされたものだった。そして家康の前には時空管理局のスバル・ナカジマ、そして真田幸村そっくりの少年、ファイと高町ヴィヴィオ、アインハルト・ストラトスが現れネフィの正体と秘密を話し始める。そして

戦国武将達はいつしか冥王と云う王を巡る管理局の闇と時空犯罪者が織り成す事件に巻き込まれていくことに…

プロローグ それは悲しき事件の始まりなの（前書き）

注意！

これは作者が戦闘描写を学ぶために書いていますので戦闘描写があまりうまくないです！

作者はvividを少ししか知りません。

オリジナル主人公が2人とも男です。

ミッドやベルカの他にオリジナルの文明が出てきます。

片方の主人公最強かもです。

ダメ文です。

それでもいいと言う方はどうぞ！

プロローグ それは悲しき事件の始まりなの

戦国の世に生きる若き武将、徳川家康。

彼が謎の人物に敗北してしまったことから物語は始まる…

「…」

ある日、家康は近くの丘にやって来ていた。
そして何者かの気配を感じていた。

「…徳川家康。」

「誰だ!？」

家康が振り向くとそこには…

「政宗…?」

奥州筆頭、伊達政宗がいた。
しかし服装と瞳の色が違った。

黒で縁取られた袖の無い白いロングコート。その下には蒼い無地の半袖のTシャツに黒の長ズボン。肘まで長い青い手の甲に埋め込まれた蒼い輝石が輝く指無し手袋に黒のロングブーツ。

さらに極めつけは右目が金色、左目が銀色ということだった。

「俺はネクスト・W・^{ワールド}フィスト。長いですからネフィとでも呼んで

ください。」

家康は瞬時にネフィと言う少年の実力を悟った。

(コイツ、強い…！)

「彼方の強さ、確かめさせて頂きます。この世界の人間を束ねし者の1人がどれほどの実力かを！」

ネフィの右腕に蒼の輝石が付いた鋼鉄の装甲が纏われる。そのまま青年は家康に拳を繰り出す。

ドガッ！

「くっ！」

家康はとっさに腕をクロスさせてガードした。

「やるしかないようだな…。ネフィー！ワシが勝ったら何故、襲ったか答えてもらうぞ！ハアア…！」

ドゴオッ…！

ネフィと家康の拳がぶつかり合う。

「虎牙玄天っ…！」

家康は瞬時にネフィの懐に飛び込み強力なボディブローを放つ。

……が

「なに!?!」

家康の一撃は腹部の目の前に現れた小さなダビデの星の形の魔方陣によって防がれていた。

「次はこちらからです…!!」

ネフィは右の拳を地面に向かって放った。

「っ!!」

家康は横に飛んでそれを避けた。

しかし地面には半径1メートルほどのクレーターが…

(アレを喰らったら、やられる…!!)

「いきます。ドラグリス…!!」

ネフィが右腕を纏う輝石に話しかける。

『The master who understood』

輝石が点滅し言葉を喋る。

「そ、その石は話すのか!?!」

家康はひどく驚いた。

「石じゃない。俺のパートナーデバイス、ドラグリスだ…！」

「ではいす？」

「話は終わりです。戦いを続行しましょう。と言っても、もう終わりです…。」

ネフィが構えを解き目を瞑る。

「……冥王めいおう」

その瞬間ネフィの足元にダビデの魔法陣が現れた。

ネフィが瞬時に再び構え、目を見開くと家康の足元と頭上にも同じように魔法陣が現れる。

頭上の魔方陣にはネフィが立っていた。

「な！？いつの間に!？」

ネフィの右腕が藍色に光り輝いていた。

そしてその右腕の拳を自分の立っている家康の頭上の魔法陣にたたきつけた。

「断罪拳だんざいけんツ!!!」

家康の頭上の魔方陣全体から家康に向かって藍色の膨大なエネルギーの砲撃が降り注いだ。

「ぐわあああああああああ……!……!……!」

そしてそこに立っていたのは……

「……」

……ネフィ。

倒れていたのはボロボロになった家康だった。

「ぐっ……!」

「……弱さは罪です。弱い者は何も守れないですから。ただ、失うのみ……」

ネフィはそう言つとどこかへと去って行った。

数十分後

「大丈夫ですか!？」

家康は女の人の声で目を覚ました。
そこにいたのは…

「大丈夫ですか!？私の声が聞こえますか!？」

紫の髪に白い鉢巻をした少女だった。

「ぐっ…!」

「あ、動いちゃダメです!今、治療したばかりなんで!あ!私の名前はスバル・ナカジマです!」

「す、スバルか…。ワシは徳川家康だ。」

スバルと家康は互いに自己紹介をする。

「家康さんですか。」

スバルはそう言うと家康に問いかける。

「家康さん。家康さんは誰に襲われたんですか?」

「…ネフィと名乗る少年だ。」

「やっぱり…この傷、まさか！冥王断罪拳を受けたんですか！？」

スバルはすごい形相で家康に問いかける。

「あ、ああ。物凄い術の使い手だった…」

「家康さんの住まいはどこですか？」

スバルが聞く。

「ああ、あそこの城に住んでいる。」

家康が指差した城を見るとスバルは固まった。

「え？もしかして、家康さんって…お、お、お殿様だったり？」

「ああ。そうだが？」

スバルの絶叫が丘に響いた。

数分後

「すみません、大きな声出して。」

スバルは落ち着き謝っていた。

「いや、いい。しかし……スバルはあのネフィについて何か知っているのか？」

「……その、家康さんの知り合いに強い人っていますか!？」

スバルの問いに家康は考える。

「政宗に幸村、三成に慶次、元親……」

「じゃあ、今あげた人の中で呼び出せる人はいますか!？」

「三成は今ちよつと事情があつてな……慶次は風来坊で今何処にいるか……」

スバルは考え込む。

「じゃあ、他の人たちを呼び出してほしいんです!」

「何故？」

「ネフィという男の子は強い人を倒しています。家康さんは、非殺傷設定だったから死ななかつたかもしれないが、もし殺傷設定だったら…」

「??？」

家康はチンプンカンプンだ。

「つまり、次は死んでしまう人もいるかもしれないんです！だから、ネフィのことを詳しく教えて厳重注意してほしいんです。あの子は、私達しか止められませんから…」

スバルは悲しそうに顔をうつむかせて言う。

「…なら、ワシの城に皆を集めそこで全員で話を聞こう。」

家康がそう言うとスバルは顔を上げる。

「あ、ありがとうございます！」

「スバルが嘘を吐いてるようには思えぬからな。」

そしてそれぞれの武將に文が届いた。

しかし……………

武田

「ぐうつ…！」

「大将！」

「お館様…！」

武田軍の大将、武田信玄がネフィの放った冥王断罪拳の下位版、冥め府烈斬いふれつざんによって地に膝を着いていた。

「甲斐の虎、武田信玄。武田の大将でかなりの実力者と聞いてはいました…」

ネフィはそう言うと背を向けて去って行くこととする。

「待たれよ…！」

「…」

ネフィはゆつくりとその声に振り向く。
二槍を持った青年がネフィを睨みつけていた。

「何故、お館様を襲った!？」

「……強いと聞いていた。だから戦っただけです。」

「某と勝負せよ!」

青年、真田幸村が構えた。

「無茶だよ旦那!そいつは大将をなんなくやっただよ!？」

迷彩服の男、猿飛佐助は自分の主に向かってそう叫んだ。

「…弱い者に興味はありません。」

ネフィはそう言うと空間を裂く。

「「「な!？」」」

「甲斐の虎、この度は俺の挑戦を受けてくださりありがとうございます。
ました。いくぞドラグリス。」

『yes・My master』

そのままネフィが空間に入ると裂け目は閉じた。

第一話 悲しみの再会なの

奥州筆頭、伊達政宗は右目である小十郎とともに家康の城に向かっていた。

「Hey小十郎！」

「何でしょうか？」

政宗は真剣な顔をして小十郎に話しかける。

「俺そつくりの男ってのは強いんだよな？」

「はい。あの徳川に信玄公がやられたようですから。」

政宗は考える。

自分とそつくりの姿をした男。

違うのは眼帯をせずに瞳が左右が違う色だということ。そして、拳を使い敬語を使うということだけだ。

「一度死合ってみたいぜ……」

政宗の体が疼く。

戦いたい…自分と同じ姿の男と！

「なら、俺の挑戦を受けてもらえますか？」

声が出るといきなり政宗の前に何者かが着地する。

政宗は馬を止めるとその人物を見やった。

「お前が俺のDoppelgängerってわけか？」

政宗の前に着地した人物。それはネフィだった。

「ドツペルゲンガー、ですか…。面白い例えですね。」

『master, that person is strong.』

「そうですね。この人は強い。」

ネフィのデバイスが点滅し言葉を発する。

ネフィはそれに答えると構えを取った。

「だから、戦るんだ…!!強くなるために…!!」

「HA!上等だ!小十郎、手え出すなよ!」

「しかし「OK!?!」…ご無理はなさらずに。」

政宗は片手に3本ずつ、計6本の刀を持った。

「ハアアアア!!!」

ネフィが連続パンチを繰り出す。

しかし政宗はそれを全て交わすと刀を交差させネフィに切りかかる。

「JET-X!!!」

「頼んだドラグリス！」

『yes, master』

政宗の攻撃が当たる直前に…

『Protection』

ネフィの目の前に薄い壁が現れ攻撃を阻む。

「これが家康の文に乗ってたmagicか…！」

「やるぞ…ドラグリス。」

『yes, master. Atonement of sins』

ドラグリスがそう言うのとネフィの体を青い魔力の炎が包み込む。

「ハア！ブレイクッ！！！」

ネフィがその炎を左手を横に振って掃うと炎が無数の槍となって政宗に向かう。

「当たらねえぜ！」

政宗は剣を振り、全ての槍を撥ねる。

「なるほど、まあここまでは何方でもできるでしょうね。それでは…これならどうでしょうか！」

ネフィがダンツと音を立てて物凄い速さで接近する。

「な！？速い…！？」

それも人間業とは思えない速さでだ。

ネフィは政宗の手前まで来ると操行を纏った右の拳でアッパーを繰り出した。

「がつ…！」

政宗の体が宙に浮く。

その瞬間、ネフィは政宗の少し上まで飛び上がると政宗の腹を殴りつけようとした。

「つ…！当たるかよ！つて、なに！？」

政宗は空中で体制を整えようとしたが体が動かずにそのままネフィの攻撃を喰らってしまった。

ドゴオツ…！

「ガハツ…！！くつ、何で…！」

「どんなに頑丈な人間でも顎は手や足と違ってあまり鍛えられていません。だからそこに強い衝撃が与えられるとそんな感じに体がうまく動かなくなるんです。下手したら気絶するかもしれませんね。」

「わかりやすいExplanation、Thank you…！」

「どういたしまして。さて、そろそろ終わりです。今回も俺の望む勝負はできませんでしたが、中々強かったです。」

ネフィはそう言つと構えを解き目を瞑る。

「……冥王」

その瞬間ネフィの足元にダビデの魔法陣が現れた。

ネフィが瞬時に再び構え、目を見開く。

地面と空中に政宗を挟むかのように同じ魔法陣が現れる。

(shit…！体が動かねえ…！)

ネフィの右腕が藍色に光り輝き、その右腕の拳を自分の立っている魔法陣にたたきつけた。

「断罪拳ツ！！！！」

家康が倒されたあの時と同じように政宗の頭上の魔方陣から政宗に向かつて藍色の砲撃が降り注いだ。

「っ…！」

「政宗様…！」

小十郎が叫ぶ。

「ダアアアアア…！」

そのとき、魔方陣のところは何者かが滑り込み政宗を救出した。

「ふう、危ない危ない。大丈夫、竜の旦那？」

「た、武田の忍!？」

迷彩服を着た真田幸村に使える忍者、猿飛佐助だった。

「烈火ああああ!!!」

空中の魔法陣が消え、砲撃のせいで抉れた地面に着地するネフィを横から高速とも言える連続の突きで攻撃した者がいた。

「真田!？」

小十郎がその者の名を叫ぶ。

それは武田信玄を慕っている武将、真田幸村だった。

「政宗殿、ご無事でござるか!？」

「あ、ああ。まだちよいとクラクラするがな…」

幸村は政宗の無事を確認するとキツとネフィを睨みつける。

「貴様、よくもお館様を…!それに政宗殿までこのような目に合わすとは、許さぬ!!!」

「俺は憎まれる存在。許さなくても別に良いですよ。」

「うおお!!!烈火ああああ!!!」

幸村は再び高速の連続突きを放つ。

「ラウンドシールド。」

ネフィはそれを片手を前に突き出しダビデの魔方陣を展開することで防いだ。

「くっ…！」

「冥王である俺の防御魔法をそのような攻撃で防げるとでも？残念ですね。俺の魔法は魔法でしか対抗できませんので。」

ネフィは一瞬で幸村の背後に回り込むと低く体制を取り、回し蹴りを足元に向かって放つ。

グラッ

「な!?!」

幸村は後ろに倒れこみネフィはその隙を突いて幸村の顔面を殴りつけようとした。

しかし幸村は瞬時に横へ転がり体制を整える。

対象を失った拳は地面を抉った。

「やりますね…。さすがは若き虎や蒼紅という宿命で結ばれたライバル…と言った所でしようか？」

「ファイヤーストライク!!」

すると突如、空中から5つの魔力火炎弾がネフィへと降り注いだ。ネフィはそれを瞬時にかわずと上空を見上げた。

上空には…

赤で縁取られた白いマントを1つの緑の宝石が着いた真つ赤なりボンでボタン代わりに止め、茶色の長ズボンに白い靴を履き、下には赤いTシャツという服装をしている。

長髪で後ろ髪を黒いゴムでポニーテールにしている赤い宝石が埋め込まれた朱色の機械の槍を持った幸村似の青年がいた。

「もう止めるセイギ!!」

「ファイか…」

「な、なんと!」

「だ、旦那が2人!?!」

「What!?!今度は幸村のDoppelgangerか!?!」

「これはいつたい…!?!」

幸村似の青年はネフィのことをセイギと呼び、ネフィは青年のこと

をファイと呼んだ。

そして幸村と佐助は幸村そっくりの青年が現れたことに驚き、政宗は幸村似の青年を幸村のドッペルゲンガーと呼んだ。

小十郎は目の前の現象を理解しようと必死に頭を働かせる。

「わざわざ管理外世界まで追ってくるなんてな…。学校はどうした？」

「そんなこと、どうでもいいだろ！！もう止めてくれセイギ！これ以上関係ない人達を傷つけないでくれ！それに、何で管理局の支部を壊滅させたりなんかしたんだよ！？」

「お前には関係ないだろう？」

ネフィ、もといセイギはめんどくさそうに幸村似の青年、ファイを見やった。

「関係なくない！何で、何でこんな酷いこと…！」

「俺はただ腕試ししているだけだ。修行をかねた、な…！」

「修行？ただの修行で時空犯罪者になるかよ！？管理局の支部を潰すなんてのも修行なのか！？」

「ハア、ん？なるほど、そーゆうことか…！」

セイギは話にならないと言う風のため息をつくと何かに気づいたような素振りをし転移魔法を使うために魔方陣を展開した。

「っ！待って！」

「待たない。それとファイ。お前が管理局側に付くなら俺達は親友でも何でもない！！敵同士だ。」

『Movement』

ドラグリスがそう言う魔法陣が強く光り輝きセイギは消えた。

「くっそおー！逃がしたあ！」

ファイは地面に降り立つとガツクリと頂垂れる。

「あーもう！どうしてあいつはいつつも逃げ足が速いんだー！！神様は不公平だあー！！！」

「おい、貴様。何者だ！どうして真田と同じ顔をしてやがる！？」

小十郎がファイに詰め寄る。

「わわっ、マフィア！？極道！？誰この人！？」

「極道じゃねえ！俺は片倉小十郎！てめえは誰だ！？」

「そっか、自己紹介がまだだったか。俺はファイ・グレイセス！第101管理世界リベルト出身です！Set・ヒルデ魔法学院に通っています！」

一同はファイの自己紹介にポカーンとしている。
聞いたことのない単語がちらちらと並べられていたからだ。

「あぁっと…別世界の住人です！これでOKかな？」

「」「別世界いいいい！?!?」「」

「あつちっ!」「」

いきなり叫ばれたのでファイは耳がキーンと鳴る。

「い、家康さんが待つてるんで急いでお城に行きましょう!」「」

ファイは何とか持ち直すと機械の槍に呼びかける。

「フレイミア、待機モードに戻ってくれ。あとバリアジャケットの解除な。」「」

『Comprehension, My master』

機械の槍に埋め込まれた赤い宝石が言葉を発すると真紅の光の球体がファイの体を包み込む。
光が消え去るとそこには…

「ハア、スバルさんになんて報告すればいいのやら…」

St・ヒルデ魔法学院の制服を着た子供姿のファイがいた。

「」「ええええええええええええ!?!?」「」

「おぉーい!」「」

そんな叫び声を遮るように家康がスバルとともに本多忠勝に乗って

飛んで来た。

「ファイ！ネファイ…ううん。セイギは！？」

「そ、その…すんません逃がしました…」

「あちゃー…」

スバルは頭を抱えた。

「政宗、幸村！皆久しぶりだな！」

「家康殿！」

「傷はもう治ったのか？」

家康に聞く政宗。

「うむ！管理局の人達のおかげでこの通りだ！」

「とりあえず、お城に行きましょう。そこで彼…セイギについて説明します。」

一同は家康の城へと向かった。

第一話 悲しみの再会なの（後書き）

戦闘描写が結構前に比べてうまくなった！

第二話 それは怒りの誓いな

家康の城のある一室で6人の武将と少年少女が3人、そして女性が1人向かい合って座っていた。

「私はスバル・ナカジマです。」

「アインハルト・ストラトスです…」

「高町ヴィヴィオです！」

「改めて自己紹介します！ファイ・グレイセスです！」

スバル達が自己紹介すると政宗達も自己紹介する。

「俺は伊達政宗だ。」

「片倉小十郎だ。」

「真田幸村と申す！」

「猿飛佐助、忍だよ。」

「俺は長曾我部元親だ！」

全員が自己紹介を終えるとスバルが本題に入った。

「まず、私達のことから話します。私達はこことは別の世界、ミッドチルダから来ました。」

武将達はその言葉に首をかしげた。
家康はすでに説明を受けていたので驚いてはいなかった。

「ミッドチルダでは魔法と言うのが盛んなんです。そして私は時空管理局という組織に所属しています。」

スバルは大まかなことを話す。

時空管理局とはたくさんの次元を管理したり時空犯罪者などを取り締まる組織だと言うこと。

ロストロギアと言う危険な物体を保護、管理したり、次元放流者を保護し元の世界に還すことなど他にも様々な任務があることを話した。

「そして、ネクスト・W・フィスト…ネフィの本名はセイギ・ランデュル。」

「セイギ君は私達と同じ魔法学校に通っていたんです。頼りがいのある、魔導士。魔法を使う人としての素質もあって…すっごく優秀だったんですよ!」

「それに、ファイとはかなり仲が良くて親友とも言える仲でした。」
ヴィヴィオとアインハルトがそう言う。

「でも、1ヶ月前…あいつは、あいつは…時空犯罪者になっちゃったんだ。」

ファイはそう言うと顔を俯かせる。

「管理局の施設の1つを1ヶ月前、何者かが壊滅させると言う事件
が起きたんです。そして、それを始まりにたくさんの方の施設が壊
滅させられていきました。その一連の事件の犯人が…」

「先ほどのセイギと言う政宗殿そっくりの人物でござるか？」

幸村の言葉に頷くスバル。

「セイギは時空犯罪者として管理局に追われる身になりました。逃
亡中もずっと支部の破壊を繰り返してそして…」

「俺達の世界に来たってわけか。」

政宗の言葉に元親が続ける。

「しかし何でまたいろんな武將を襲ったんだ？」

「腕試しとか言ってたけど？」

「修行とも言ってたな。」

佐助と小十郎がそう言う。

「多分、本当に腕試しや修行だったんだ。」

ポツリとファイが言う。

「あいつは嘘を言うときは目をそらす。もう癖って言うていいほど
にね。」

ファイの言葉に政宗はガシガシと頭をかく。

「チツ、腕試しの相手とは…俺も随分舐められたもんだ…！しっかし、それほどアイツは強かった…」

「それはそうですね。」

アインハルトの言葉に全員の視線が集まる。

「セイギは冥王を告ぐ者ですから。」

「「「冥王？」」」

「はい。古代ベルカと言う文明よりさらに昔に存在していたと言う忘れられし都、アルハザード。そこは死者をも蘇らせる秘術があると言われていきます。」

「な！？死者をも蘇らせるだつて!?!」

佐助が大声を上げる。

「そうですね。そのアルハザードに住みし一族。それが冥王の一族です。」

「冥王の一族…」

「彼らの一族には代々、冥王と言う人々の罪を裁く役目を持った特殊な人間が生まれるんです。冥王の刻印がセイギの手にはありませんたから確かです。」

元親が手を挙げる。

「おいおいちよつと待てよ。冥王つてのは人々の罪を裁くんだろ？何で罪を犯した人間を捕まえる管理局をぶつ潰そうなんてするんだよ？」

「それが…わからないんです。ですが、セイギは確実に管理局に敵対意識を持っています。何故、敵対意識を持つかと言うのがわからないんですが…。ヒントはこれにあると思うんです。」

アインハルトがスバルに視線を向けるとスバルは映像を空中に写した。

「これは予言の著書という能力を持った人が送ってきた予言が書かれた詩文なんです。」

スバルは一呼吸置くと読み上げ始めた。

「『冥府より出でし裁きの王は正義の裏にある闇の前に怒り狂う。正義の幻想に惑わされし者達はその下から離れ裁きの王に就くであらう。』」

裁きの王は闇を真の光で照らし出し幻想を打ち消すであらう。『』

「冥府より出でし裁きの王…これはセイギのことだと思っんです。だけど正義の裏にある闇って言うのがわからないんです。」

「とにかく、時空犯罪者である彼を逮捕することが私達の目的です。皆さんは「某も協力するでござる！」え？」

幸村が立ち上がり言う。

「お館様を襲ったことは許せぬ。しかし何故セイギ殿が怒り狂っているのかも知りたいのでござる。手伝えたら正義の裏にある闇と言
うのを倒す手伝いもしたいでござるからな。」

「け、けど危険なんですよ!?!」

「HA!俺もやるぜ真田幸村!」

「ええ!?!」

政宗の言葉にスバルは声を上げる。

「こつちは借りを返さなくちゃ気がすまないんだ…!」

「あ、あのお…」

「というわけで某らは協力するでござるよスバル殿!」

「そうじゃなくてえ…!!」

ファイがスクツと立ち上がった。

「スバル姉、協力してもらおうよ!この人達十分強いんだよ?戦力も大幅に上がると思うんだけどなあ。」

「あのねえファイ!これはそう言う問題じゃないんだよ!?!」

「大丈夫大丈夫!何とかなるって!あ、ちょっと修行してくる!」

「コラ、ファイー!!」

ファイはそのままフラフラっと外に出て行く。

「あのファイってやつ、姿はお前そっくりだがノリは風来坊そっくりだな…(汗)」

「そついえば見たところファイ殿は某と同じ槍を使うようすでござる。一緒に鍛錬をしてくるでござる!」

幸村はそう言つと出て行く。

「ちよ、話はまだ終わってないんですよおおおおお!」

スバルの叫び声が城中に響き渡った。

???

「……」

次元の狭間に浮かぶ巨大な島。

そこは何とあの忘れられし都『アルハザード』であった。

そのアルハザードのある丘にセイギは子供姿で立っていた。

前にあるのは十字架型の棒に飾られた花冠が飾ってあるたくさんの

小さな山。

それは手作りの小さな墓だった。

「母さん、父さん。」

「セイギ、こんな所にいたのね。」

後ろからかけられた声に振り返るとそこには…

「ご飯ができたわよ。アリシアも待ってるわ。」

「そう、ですか…」

管理局に所属するフェイト・T・ハラオウンの実の母、プレシア・テスタロッサだった。

彼女は1年前、次元の狭間を漂っているところをセイギに助けられたのだ。

病気を治してもらい娘のアリシアもアルハザードの秘術によって生き返り今は3人でこのアルハザードの地で暮らしている。

「…管理局も惨いことをしたわね。冥王の怒りを買ってしまつことになるなんて…」

「管理局は潰します。そして必ず、皆の敵を取って見せます…!!」
セイギは拳を握り締めてそう言った。

「……そうね。大切な人を失った悲しみは私もよくわかるから。しかし、何故アルハザードの秘術で彼らは生き返らなかったの？」

プレシアは小さな山々を見てそう言った。

「条件が満たされてなかったんです。血をほとんど流さず死んでいくことがアルハザードの秘術で生き返る方法ですから。」

「そう。管理局を潰すときは私も協力するわ。」

「ありがとうございます。」

「フェイトにも、謝りたいから…行かせてね。」

プレシアはそう言うと丘から去って行った。

セイギも少し丘を名残惜しそうに見つめると去って行った。

… 怒り狂ったのは正義の裏の闇のせい…

「絶対に許さない。時空管理局…!!」

第二話 それは怒りの誓いなのか（後書き）

次回はセイギが管理局の支部の一つを潰すのとテストロッサー一家との日常の回です。

第三話 新たな仲間との出会いなの！

セイギはある世界の管理局の支部の近くに来ていた。

「…ドラグリス、セットアップ。」

『Setup』

ドラグリスから光が溢れ出しセイギを包み込む。

光の球体の中でセイギは子供の姿から大人の姿になりバリアジャケットを纏った。

「いくぞ、あの支部の地下には人体実験の研究所がある。」

『yes, My master』

セイギは構えると一気に支部に向かってダッシュした。

ドゴオッ！！

「な、何だ！？」

セイギは壁をぶち破って支部の中に進入した。

「せ、セイギ・ランデュル！？」

「くっ、この支部の破壊が目的か…！！」

「撃てええええ!!!」

管理局員が集まり一斉にセイギに向かって射撃魔法を撃つ。

「こんな魔法で、俺が倒せるとでも…?あまいっ…!!!」

セイギはその射撃魔法を全て避けると一瞬で局員達を全員、殴って壁に叩きつけた。

「くわあああああ!!!」

「いけえ!!!何としてでも奴を逮捕しろ!!!」

「いくぞ、ドラグリス。」

『Dash・Destruction』

「ダアアアアア!!!」

セイギは壁を走ると一気にジャンプし体を捻りながら拳を地面に叩きつけた。

「ダツシュ・ディストラクション!!!」

衝撃波が局員達を吹き飛ばし壁に埋もれさせる。

「ここら辺にいるのはあらかた片付いた。先に進むぞ!」

『OK』

ある管理局員がセイギを逮捕しようと動いているとき隠し扉のよう
なものを見つけていた。

「これは…」

管理局員が隠し扉を開けるとそこには…

「な!？」

人体実験の研究所があった。
被験者達が生体ポッドに入れられて眠っている。

「あ、あああ…何で、何で人体実験の研究所が、管理局の支部に…
？」

管理局員は脳裏を横切った推測に体を恐怖に震わせた。

「そんな、そんなことは…！」

「見られてしまったか。」

太い声が響く。

管理局員が恐る恐る顔を向けると…

「部隊長…」

自分が所属している支部の部隊の隊長が自分にデバイスを向けていた。

「見られたからには仕方がない。君は優秀な人材だったが…死んでもらおう。」

「そ、そんな…！管理局は本当に！？」

「そうだ。だが、それも言えないようにしてやろう。大丈夫だ。楽に殺してあげよう。」

自分に突きつけられた真実を知った管理局員はガクリと膝を突いた。自分が信じていた正義が悪だったことを知り、これから死ぬのだと言ふ事実には彼の頭は真っ白だった。

「弟の敵、討ちたかったなあ…」

かつて自分の目の前で殺された弟の敵を討つために彼は管理局に入った。

しかしそれすら達成されずに殺されると言うことに彼の頭の中に浮かんだのは…

死。

「さあ、死「ぬのはアンタのほうだ。「なに！？グハア！！」

後ろから声がすると隊長の体が壁際まで吹き飛ぶ。

「くっ…！！」

「せ、セイギ・ランデュル！？」

隊長の体を吹っ飛ばしたのはセイギだった。

「何故、貴様がここに！？他の同員達は！？」

隊長は立ち上がるとそう言う。

「ああ、殺してはいないけど2度と魔導士として戦えない体にはしてやった。しばらくは起き上がれないな。」

「くっ…！！化け物があああ！！」

セイギは瞬時に隊長の顔を鷲掴むとそのまま壁にたたきつけた。

「ゴツ！ガハアアア…」

隊長は白目をむいて気絶する。

「こいつが、この支部の研究所の最高責任者のようだな。」

『Don't kill Master』

「わかってるよ。さて、被験者達を解放するか…」

セイギは歩みを進める。

そのとき、管理局員のほうへと視線を向けた。

「っ！」

「……一緒に来ますか？」

「そ、それは…」

管理局員は迷った。

犯罪者と言う烙印を押されているセイギ。

しかし先ほどの行動を見るとまるで管理局と言う名の悪を裁くとする正義の使者のようではないか。

「お、お前は何なんだ！？正義なのか！？悪なのか！？」

「…それは他人が決めることです。俺がやっているのが正義なのか、悪なのかってことはね。」

管理局員はその言葉に嘘はないと自己判断しセイギの後を追った。

「酷い…！」

管理局員は呆然とした。

何しろ被験者の子供や大人達が苦しんでいたのだから。

「…皆、もう大丈夫です。俺が転移魔法を展開します。これ異常な
いってくらい安全な場所に連れて行きますから。」

そのままセイギは魔方陣を展開する。

「君、皆を魔方陣の上に。」

「あ、ああ！」

全員が魔法陣に乗ったのを確認するとセイギは転送をした。

「さて、後は…来てください！」

セイギは管理局員の腕を掴むと外に転移した。
支部から離れると支部が爆発する。

「なあ！？」

「爆弾を設置してましたから。あの支部から俺がいなくなったら爆
発する爆弾を。さて、君はどうします？管理局の闇を知ってしまっ

た以上、君にはもう居場所がない。下手したら先ほどのように命を取られかねませんよ?」

「……………」

「俺は管理局を潰します。」

「え!?!」

セイギは爆発跡を見ながらそう言う。

「管理局の闇のせいで先ほどの人達のようにまだ、多くの人が苦しんでいますから。君は、俺と一緒に来ますか? 弟さんの敵討ち、できるかもですよ?」

「え? それって……………」

「弟さんは管理局の局員によって殺されました。」

非情な言葉。

今まで自分が弟の敵の組織に属していたことの現実に心が折れた管理局員は泣き出した。

「うっ、うわあああああ!! 僕は、僕はあああああ!!」

「……………」

「僕は、うっぐ…僕は、弟の敵を討ちたい!!」

「わかりました。俺はその復讐に協力しましょう。君の名は?」

セイギは管理局員の手を取って立ち上がらせる。

「僕の名はラグラス。ラグラス・ウィンガルだ！」

「改めて自己紹介する。俺はセイギ・ランデュルだ。」

2人はその場でガツチリと硬い握手をした。

アルハザード

「あ、ご、ゴメンってあれ？敬語…」

「ああ、俺は仲間と認めた奴には敬語なんだ。他にはお世話になってる人とか…」

「セイギ！」

声が出たほうに顔を向けるとそこにはプレシアがいた。

「プレシアさん。」

「プレシア！？あのプレシア・テストロッサ！？」

「ああ。次元の狭間で漂つてるところを俺が助けた。」

プレシアはラグラスに笑顔を向けるとお辞儀をした。

「プレシア・テストロッサよ。ここでは皆の母親役をしているわ。」

「皆？」

ラグラスが見るとちゃんとした服を着せられた人体実験の被験者の人達がいた。

「アルハザードは普通じゃ行けない所。だからここが一番安全なんだ。」

そう言うとセイギはバリアジャケットを解除しドラグリスも待機状態に戻し子供の姿に戻る。

「んなぁあ!？」

「さっきのは冥王としての姿。本当の姿はこっちだ。」

「そ、そうなのか…」

「さて、そのデバイス。管理局の至急品らしいからこっちでラグラス専用のデバイスを作るよ。」

「あ、ああ！よろしく頼む！」

ラグラスは専用デバイスを持って戦うことを夢見ていたためにそれを聞いたときはキラキラと顔を輝かせた。

「僕はそれまで何をすればいい？」

「そうだな…技を磨くのと、魔力をもっと扱えるようにする特訓だな！」

セイギはそう言うとラグラスに至急品ではなく別のデバイスを持たせる。

「それを使って俺と戦うんだ。」

「わかった！」

ラグラスはデバイスを起動させるとセイギと特訓を始めた。

音声のみで現状把握をお願いします。

ドゴツッ!!

「グハア！」

「もっと魔力を一点に溜めて！」

「わかった！」

ズガンン！ドドドドドドツズガンンッ！

そして、特訓が終わった頃にはラグラスはほとんど戦闘不能状態だったがあの高町なのはと戦りあえるまで上達していたそうだ。

「これが彼方専用のデバイス『ザ・ソウルオブライト』よ。」

プレシアがラグラスに金で縁取られ中心に銀色の丸い宝石が埋め込まれたダビデ型のペンダントを渡す。

「これが僕の専用デバイス…。よし、ザ・ソウルオブライト！セツトアップ!!！」

『Setup』

ラグラスの体が光に包まれる。

するとラグラスがバリアジャケットを纏い両手に拳銃の形になったザ・ソウルオブライトを構えていた

「凄い、体が物凄く軽い感じがする!」

ラグラスのバリアジャケット姿は青いシャツの上に黒い上着を着、白ズボンに黒いホルダー付きのベルトをしている。

そして手には黒い指なし手袋をしていた。

「そのデバイスはアルハザードの技術も応用されてるからかなり使い心地はいいわよ。大切に使ってあげてね。」

「はい!」

ラグラスはデバイスを待機状態に戻す。

そしてザ・ソウルオブライトは長いのでソラと言うあだ名で呼ばれるようになった。

第三話 新たな仲間との出会いなの！（後書き）

日常編、書けなかった…orz

気を取り直して次回はラゲラスの戦闘です。

第四話 初めての任務(?)なの!

「…」

セイギは血塗れの長い廊下を歩んでいた。

「…」

その廊下の横には、たくさんの時空管理局の局員の死体…

「…義母さん、義父さん…。っ!」

セイギの目の前に管理局の局員が大勢現れる。

「っ!うう…!うわあああああああああああ!…!…!」

セイギは声を荒げると局員達を殺そうと駆け出した。
憎しみと悲しみに侵食された怒りの形相のまま…

「お前らが殺した!皆を!!罪人は…裁くっ!…!」

セイギの大声が廊下に響き渡った。

「っ!?!?」

政宗は汗をビツシヨリかいて飛び起きた。

「い、今のは…」

今の夢を整理する。

最初は何か機械のような物からセイギが大人のTシャツ1枚で倒れてきた。

それを受け止めた義父親が義母親に家族にしてあげようと言う。

そしてそれからは使用人達や義両親と過ごす楽しい日々が走馬灯のように流れ、冒頭のシーンになったのだった。

「もしかして…あのセイギと言うboyは、義両親を、殺された？」

だとしたらいったい誰が…

政宗の頭を嫌な答えが横切る。

「セイギが怒り狂った理由が、時空管理局が…」

しかし、そうとは考えられない。

スバルはとても良い人だったし、正義を貫いていた。真っ直ぐな瞳だっただけだった。

「正義の裏にある闇。時空管理局の裏？」

時空管理局は裏で非業的な行いをしていて、それを一部の者は知らないとしたら？

「shit！俺は、どうすればいいんだ…？」

政宗はくしゃりと自分の前髪を上げた。すると…

「愚問な自問自答ですね。」

政宗はハツと縁側に顔を向ける。

そこには、子供姿のセイギが立っていた。

「お前、いつから…!?!」

「今さっきです。」

「それが、本当の姿かよ？」

「そうです。」

政宗は感情なく告げるセイギに苦笑いした。

先ほどの夢では感情を爆発させていたのに、まるであの夢で感情を全て失くしてしまったかのように今のセイギは大人しい。

物静かで異世界の同じ自分とは思えないほどだ。

「何を笑っているんですか？」

「sorry。でも、敬語は止めてくれないか？同じ自分なのにつげえおかしく感じる。」

「変だね。」

すぐに敬語を止めたセイギ。

「素直なほうなんだな。」

「彼方が止めるといったから止めたんだ。」

「ここには何の用で来た？」

セイギはデバイスを起動させる。

「ドラグリス、セットアップ。」

『s e t u p』

セイギが大人の姿になりバリアジャケットを纏う。

「彼方からイツらに言っておいてくれ。もう、俺には関わるなつて。それと、時空管理局は危険だ。すぐに抜けるつて。」

「HA！答えはNOだぜ。それはお前から言うんだな。」

「俺が何を言っただって管理局に心酔いしているイツらは信用しないだろう。犯罪者の俺の言葉なんかはな。だから、頼んだ。」

セイギはそう言つと靴に藍色に発光する羽を生やして空高く飛んで何処かへと去つて行くつとした。

「s u t p--」

「なんだ？」

「今夜も、ここに来ねえか？」

「考えておじい。」

セイギはそいつ言つと今度こそ去って行った。

アルハザード

セイギはあの墓の丘にやって来ていた。
風が吹き、草が揺れ、そこらに咲いている花の花弁が舞う。

「義母さん、義父さん、俺は元気にやってる。リリンさん、ご飯はちゃんと食べてるよ。リアン、また一緒に魔法の練習をしようって約、果たせなくてゴメンな。」

セイギはそう言うと涙を流し丘に背を向けた。
そしてそのまま自分の家である研究所のような屋敷に向かった。

「管理局の支部を潰しに行く。着いて来るか？」

「行く行く！絶対に行く！」

ラグラスはその言葉とともにソラを持ってセイギの後を追った。

「正確には人体実験の研究所潰しな。」

「ああ。」

セイギは人体実験の研究所のある支部を優先的に壊滅させている。被験者達を逸早く解放するためだ。

「俺が囷になる。ラグラス。お前は人体実験の研究所を目指してそのシステムを掌握。研究所の被験者達を解放するんだ。解放した被験者達はすぐにこのアルハザードに専用転移魔法で送ること。」

専用転移魔法：セイギが作った管理局員、もしくは管理局に味方している者は転移魔法陣に乗ってもその場に取り残されてしまうという転移魔法だ。

これをアルハザードにいる全員が会得している。

「了解したよ。」

「それと、これ。」

セイギはラグラスに藍色の宝石のついた指輪を渡す。

「これは？」

「冥王の守護者の証。これがあれば冥王の力を少しだけ使える。俺がラグラスを守護者として認めている間だけだ。」

「ハア！？何で僕がそんなたいそうなものを貰えるんだ!？」

「俺が冥王の守護者として認めただから。」

「マジ?」

「マジ。」

セイギの真面目な顔を見てラグラスは指輪を着ける。

「ありがと。君に認め続けてもらえるように頑張るよ。」

「期待している。」

15か16ほどの年の金髪の少女が走ってくる。
プレシアの娘であるアリシアだ。

「セイギ！サポート準備完了よ！」

「ありがとうアリシア。」

「絶対フェイトを…管理局に騙されてる可哀想な人達を助けてあげてよね！」

「まだ少し待ってもらおうことになるけど…わかってる。絶対助ける。」

セイギとラグラスはデバイスを起動し転移魔法陣に乗る。

「いくぞ。ラグラス、覚悟は「とっくにできてるさ！」そうか。」

ラグラスは管理局の裏切り者として扱われるだろう。

今まで頑張って築き上げてきた地位やその努力がすべて無駄になってしまっだろう。

ミッドチルダや管理世界の人々を敵にしまっであろう。

そんな覚悟がある人間など普通はほとんどいない。

故にラグラスに覚悟はあるかと聞いたのだ。
2人はその場から管理局の支部の前に移動した。

管理局支部

「おらおらおらおらああああ！！！！」

ラグラスはデバイスから魔力弾を発射し局員を集める。
死角ではセイギが魔力砲撃を打つ準備をしていた。

「ボルテック・スピアアアアア！！！！」

ラグラスは自分の真上に現れた魔法陣に向かって魔法弾を何発も打ち込む。

すると局員達の上に魔法陣が現れそこからいくつもの魔力弾が雷を帯びて降り注いだ。

「くわああああああ！！！！」「」

そして支部にいる全ての管理局員が集まった。
そしてそこを狙って…

「う、上だ！上から来るぞ！」

「冥王…」

セイギは上空で冥王断罪拳を放った。

「断罪拳ツツ！！！！」

「くわああああああああ！！！！！！！！！！」「」

全ての局員が地に伏したことを確認すると2人は人体実験研究所に
移動し被験者達を解放。
アルハザードに送った。

第四話 初めての任務(?)なの!(後書き)

次回はセイギと政宗のターン!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2751x/>

魔法戦記リリカルなのはvivid of Basara

2011年10月26日14時59分発行